

## いわゆる「学級崩壊」について

～ 『学級経営の充実に関する調査研究』(中間まとめ)の概要～

(平成11年9月)

最近、いわゆる「学級崩壊」といわれる現象が話題になっています。こうした現象は決して多くの学校で起きているわけではありませんが、文部省においてもその実態を把握するため、平成11年2月に「学級経営研究会」(国立教育研究所内外の研究者や学校現場の関係者等で構成)にその研究委嘱をいたしました。同研究会では、全国各地で小学校における学級経営に関して関係者から聞き取り調査を行い、9月に中間まとめを発表しました。

文部省としては、今後とも調査研究を進め、具体の対応策を考えていきます。

### 「学級がうまく機能しない状況」について

「学級がうまく機能しない状況」とは、「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」を指しています。

「学級がうまく機能しない状況」の要因としては、学級担任の指導力不足の問題や学校の対応の問題、子どもの生活や人間関係の変化及び家庭・地域社会の教育力の低下等が考えられます。

また、これらは、ある一つの「原因」によって「結果」が生まれるかのような単純な対応関係ではなく、複合的な要因が積み重なって起こります。問題解決のための特效薬はなく、複合している諸要因に一つ一つ丁寧に対処していかなければならないものと考えています。

### 「学級がうまく機能しない状況」の分析と対応策

学級がうまく機能しない状況にあるとした事例 102学級

(事例を10のケースに類型化し、その多くは複数のケースに当てはまる)

#### ケース1 就学前教育との連携・協力が不足している事例(11学級)

- ・ 子どもの実態に即した学級づくりを進めること、就学前教育との連携・協力を進め、必要な情報を交換すること。

ケース2 特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもがいる事例 (26学級)

- ・ 教育的配慮が必要かどうかの的確な判断をすること、息の長い取組のための体制づくりをすること、一人一人の子どもの「違い」を生かす学級づくりをすること。

ケース3 必要な養育を家庭で受けていない子どもがいる事例 (21学級)

- ・ 子どもの教育環境を的確に把握し、関係機関との間に連携・協力関係を築いたり、子どもとの間の信頼関係を築くこと。

ケース4 授業の内容と方法に不満を持つ子どもがいる事例 (65学級)

- ・ 授業方法の柔軟な選択を行うこと、そのため校内研修等の充実やティーム・ティーチング、体験的な活動など多様な工夫を行うこと、授業時間以外の言葉かけの工夫も大切であること。

ケース5 いじめなどの問題行動への適切な対応が遅れた事例 (38学級)

- ・ いじめに対しては子どもの心理の理解に努め早期の適切な対応をするなど根本的な問題を探り当て、組織的に対応すること。

ケース6 校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していない事例

(30学級)

- ・ 教員の異動直後は校務分掌などで経営的配慮をし、問題状況に対しては、校長はリーダーシップを発揮して、職員の間にも相談しやすい雰囲気づくりを進めること。

ケース7 教師の学級経営が柔軟性を欠いている事例

(74学級)

- ・ 学級間の情報交換などによって、問題状況に関する共通理解を図ること、学級担任の指導力を高めるための適正な校内人事に配慮すること。

ケース8 学校と家庭などとの対話が不十分で信頼関係が築けず対応が遅れた事例 (27学級)

- ・ 学校の説明責任を果たすこと、保護者との対話や情報交換を工夫するなど一体となって問題解決に取り組むこと、地域や教育委員会等との連携を推進すること。

ケース9 校内での研究や実践の成果が学校全体で生かされなかった事例

(16学級)

- ・ 校内の組織体制の充実を図ること、ティーム・ティーチングなど教授・学習組織の工夫を行い、それを校内で学び合うこと。

ケース10 家庭のしつけや学校の対応に問題があった事例

(14学級)

- ・ 保護者の子育て状況を把握し適切に対応すること、学校と地域の協力関係づくりを進めること、早期の対応や柔軟な学校運営に努めること。